

里地通信 2001・1

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階(財)水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

平成12年、西暦2000年をふりかえって

20世紀も最後の年となった平成12年は、里地ネットワークにとって丸3年を迎える年でした。

設立当初の目標だった「自治」「ものづくり」「ツーリズム」「環境保全型技術」の4つの要素を、かけあしながら、垣間見ることができたように思えます。

自治 自治の先進地といわれる社会システムを築きあげてこられた北海道標茶町、熊本県小国町、鳥取県智頭町の3方式からは地域経営の基本を痛感させられました。また、熊本県水俣市の「もやい直し運動」からはじまった自治のしくみと環境政策には、既存の価値感を超える“まなざし”のあり方を学んだ方が多かったのではないかと思います。ほかに、さまざまな地域でイベントを通じた活性化を図る取り組みを見させていただきました。

ものづくり (財)イオングループ環境財団と共催で行わせていただいている「里地・里山保全活動」は、全国各地にユニークなモノやコトを生み出すきっかけになっています。愛知県美浜町の白炭窯づくりをきっかけに、知多半島の半島内流通が、竹炭と地場野菜を中心にジャスコ半田店で始まっています。岩手県沢内村の地元学と里地保全の取り組みをきっかけとして廃校を利用した地域地元学センターの試みが検討されはじめました。長野県飯山市小菅の里では、里山保全の継続的などりくみが開始されています。山形県最上町の満沢小学校では、地元学の手法をとり入れた総合的な学習が開始されます。

今後は、竹炭と地場野菜に限らず、モノが地域内自給され、風土産品として開発、流通されることや、地元学の技法が小中学校の体系的な学習の中に組み込まれていくことで、地域の生活文化、伝承技術の継承に役立てばと願っています。

ツーリズム 「ツーリズム」という視点では「みなまたの歩き方」の刊行を通じて、ツーリズムと地域活性化の問いかけを行いました。21世紀に魅力ある地域とはどのようなものなのか、試行錯誤した結果の出版です。ツーリズムにもとめられているのは、出会いではないかと思います。21世紀に求められている人との出会い、地域との出会い、モノとの出会いの一つの形です。水俣との出会いを通じた新たな価値感が芽生えることを期待しています。

技術 環境保全型技術は、まだ、取り組みを始めたばかりです。身の丈にあった技術、地球環境に過剰な負荷をかけない技術、持続的な人間生活を可能とする技術とは何かを、引き続き検討しながら、さまざまな里地に紹介してゆければと思います。本年の調査テーマは、廃棄物の減量化とリサイクルの促進です。これにかかわる技術と市民の取り組みを調査中です。また、エネルギービジョンを通じて、マイクロ水力とマイクロ風力の市民による設置プロジェクトを検討しています。順不同になりますができるところから順次実践していきたいと思っています。

21世紀、平成13年、第4期の活動指針

これまでの調査取材等をさせていただいたさまざまな人々、地域の取り組みは、それぞれ先鋭的で、これからの21世紀には欠かすことのできないものばかりであると確信しています。第4期には、これらのデータベース化をはかり、多くの皆さまの地域づくりの一助になるよう整理してゆきたいと思います。

特に、環境保全型技術や里山保全の技法、ワークショップ技法などは、国内のみならずモンsoonアジア、水稲稲作文化圏で広く活用できると思いますので、アジアの里地で活用していただけるような情報の整理と精査を行ってゆきたいと思います。本件と併せて、プロジェクト体制を組めるのであれば、アジア数カ国の環境調査を行ないたいと考えています。

昨年からはじまったトキの野生復帰をめざした環境省「共生と循環の地域社会づくりモデル事業(佐渡地域)」は、里地ネットワークの側面から見ると、目標とテーマが明確な持続可能な里地づくりの事業でもあります。さまざまな知恵を佐渡に集め、共生と循環が可能な地域社会が生まれていくよう努力してゆきたいと思えます。

(財)イオングループ環境財団との共催の里山保全活動は、本年で3カ年目になります。これまで、全国

の9地域での保全活動を行い、地域毎に異なるテーマで、地域のNGO、市町村とともに相互に学びあいながら実施してきました。平成14年3月までに、11カ所の里地・里山保全計画を実施してまいりますので、皆



様のご協力とご支援をよろしくお願ひ申し上げます。最終会の20回目は、平成14年の3月頃に、全国の方々にお集まりいただき交流シンポジウムを開催したいと考えております。夕方の意見交換会、交流会からはじめて、翌日は、里山リーダーたちの全員討論会のような形式が良いのではと試案しています。開催地に関して我が里地でというご要望をいただければ幸いです。

今後の実施計画は、

2月17日(土)18日(日)埼玉県三芳町を中心とする「三富新田」での平地林と落ち葉の堆肥化、農の循環を学びみどりの三富を体験する保全活動。

3月24日(土)25日(日)には、埼玉県小川町の自然エネルギー学校の取り組みを学び、地場材を用いた自然エネルギー学校の拠点づくりを行います。

4月以降は細部を現在調整中ですので、追って連絡いたします。

上記以外の地域新・省・エネルギービジョン、地元学の研修会、ワークショップ等のご要望に応じたご協力は従来どおり実施していきます。

【2000年の主な地域活動の紹介】

：実施活動、 ：検討会、委員会、 ：講演、講師、 ：編集、発行
 ：現場調査、ヒアリング他、 ：視察、調査活動等への参加

- 2000・1・8 環境文明研究所・検討会「21世紀に市民活動の果たす役割・委員」
- 2000・1・11 三重県鈴鹿市・イオン里山保全プロジェクト「実施内容検討会」
- 2000・1・13～ 三重県自治会館組合「ツーステップ研修・講師」
- 2000・1・17～ 新エネビジョン岩手県湯田町「エネルギー探検隊」
- 2000・1・24 新エネビジョン岩手県湯田町「委員会」
- 2000・1・17 千葉県環境情報センター「地域づくりセミナー講師」
- 2000・2・1 埼玉県小川町自然エネルギー学校「視察」
- 2000・2・2～ イオン里山保全活動・島根県大田市「実施内容検討会」
- 2000・2・11～ イオン里山保全活動・愛知県美浜町「炭焼窯づくりと里山カーニバル」
- 2000・2・18 シンポジウム「田園生活のすすめ」コーディネーター
- 2000・2・24～ 岩手県湯田町「地元学調査」
- 2000・2・28 新エネビジョン岩手県湯田町「委員会」
- 2000・3・5 岩手県沢内村「地元学事前調査」
- 2000・3・6 水俣市取材調査「みなまたの歩き方」
- 2000・3・13 岩手大学清水研究室「新エネビジョン会議」
- 2000・3・15 イオン里山プロジェクト・鎌倉市山崎の谷戸
- 2000・3・17～ 国土緑化推進機構・岡山県佐用町「グリーンカレッジ講師」
- 2000・3・20～ イオン里山保全活動・島根県太田市「草原の野焼き」
- 2000・4・14～ イオン里山保全活動・長野県飯山市「島崎先生の森林塾」
- 2000・4・20～ イオン里山保全活動・岩手県沢内村「実施内容検討会」
- 2000・5・1～ イオン里山保全活動・三重県鈴鹿市「実施内容検討会」
- 2000・5・11 愛知県美浜町「まちづくりセミナー講師」
- 2000・5・12 イオン里山保全活動・三重県鈴鹿市事前調査
- 2000・5・13 イオン里山保全活動・三重県深山国有林事前調査
- 2000・5・16 「里地だより・循環と共生の旅」編集発行
- 2000・5・17 パンフレット「里地ネットワーク」「地元学」完成
- 2000・5・22 「みなまたの歩き方」(合同出版)刊行
- 2000・5・24～ 熊本県水俣市「環境自治体会議」第21分化会コーディネーター
- 2000・6・7～ 山形県朝日町生活地理研究所、山形県最上町、大玉村訪問
- 2000・6・10～ 環境庁「エコライフフェア」実施
- 2000・6・15 愛知県美浜町「ジャスコ竹炭試行販売会議」
- 2000・6・16 三重県鈴鹿市・イオン里山保全「実施内容検討会」
- 2000・6・17～ 三重県鈴鹿市・イオン里山保全活動「石組みとピオトープ」
- 2000・6・24～ 北海道白滝村・イオン里山保全「実施内容検討会」
- 2000・7・5～ 山形県新庄市「雪サミット」
- 2000・7・8～ 兵庫県豊岡市「コウノトリ国際シンポジウム」

- 2000・7・19 棚田支援ネットワーク・棚田講座講師「棚田と地域づくり」
- 2000・7・20～ 山形県最上町・イオン里山保全活動「学校版地元学と里地保全」
- 2000・7・26～ 岩手県沢内村・イオン里山保全活動「集落版地元学と里地保全」
- 2000・7・28 福島県大玉村地元学事前調査
- 2000・8・3～ 北海道白滝村・イオン里山保全事前調査
- 2000・8・6～ 北海道白滝村・イオン里山保全「水路の開設と小屋づくり」
- 2000・8・22～ 佐渡島・トキプロジェクト事前調査
- 2000・8・28 岩手県千厩町「地域省エネビジョン委員会」
- 2000・8・30～ 岩手県葛巻町「風サミット」
- 2000・9・1 (財)イオングループ環境財団「設立10周年記念シンポジウム・パネラー」
- 2000・9・7～ 福島県大玉村地域新エネルギービジョン「エネルギー探検隊」
- 2000・9・11～ 佐渡島・トキプロジェクト地域調査
- 2000・9・14～ 岐阜県馬瀬村現地調査
- 2000・9・28～ 福島県大玉村「風況概査」開始(4ヶ月間)
- 2000・10・2～ 佐渡島・トキプロジェクト地域調査
- 2000・10・4～ 福島県大玉村「地元学調査」
- 2000・10・6 佐渡島「共生と循環の地域社会づくり検討委員会」
- 2000・10・10～ 福島県大玉村「地域新エネルギービジョン委員会」
- 2000・10・11 両津市野浦地区「地元学・実施検討会議」
- 2000・10・23 両津市野浦地区「地元学・住民総会」
- 2000・10・27～ 両津市野浦地区「野浦生活文化探検隊」
- 2000・10・28～ 新穂村「トキのすんでいた地域の探検隊」
- 2000・11・3～ 北海道日高町・国土緑化推進機構「グリーンカレッジ・講師」
- 2000・11・7～ 岩手県葛巻町・東山町・大玉村エネルギー視察調査
- 2000・11・17～ 佐渡島「トキ・シンポジウム」準備
- 2000・11・18 佐渡島「トキ・シンポジウム」
- 2000・11・19 佐渡島「トキ・シンポジウム」エクスカーション
- 2000・11・22～ 福島県大玉村「あだたら自然観察会」
- 2000・11・25 「全国川上サミット・基調報告」(「持続可能社会と地域づくり」)
- 2000・11・29～ 農林水産環境展・ブース出展及び物質循環に関する企業概況調査
- 2000・12・5 岩手県千厩町「地域省エネビジョン委員会」
- 2000・12・8 埼玉県三芳町・イオン里山保全活動「実施内容検討会」
- 2000・12・9～ 兵庫県神戸市「地球温暖化対策 シンポジウム」
- 2000・12・18～ 秋田県二ツ井町・イオン里山保全活動「実施内容検討会」
- 2000・12・20 福島県大玉村「地域新エネルギービジョン委員会」
- 2000・12・26 埼玉県三芳町・小川町・イオン里山保全活動「実施内容検討会」
- 2000・12・28～ 佐渡島・トキプロジェクト調査

(以上は、事務局内作業及び調査等を除く活動です。記事、メディアへの掲載資料等に関しましては、整理のつき次第ホームページで紹介させていただきたいと思います)

トキの野生復帰プロジェクト

報告 トキの野生復帰をめざして 共生と循環の地域社会づくりシンポジウム

平成12年11月18・19日、新潟県佐渡島、両津市の佐渡島開発総合センターにて、シンポジウムを開催しました。ご存じの通り、中国から贈られたトキのつがいにより、平成11年度に1羽、今年度には2羽のヒナが誕生しました。人工繁殖によって個体数の増加がはじまりました。近い将来の課題として、「野生復帰」のことを考える段階になっています。

日本における最後のトキ生息地であり、保護と再生の事業を続けてきた佐渡島で、将来、トキが舞う姿を見ることができるのでしょうか。そして、そのとき、人々の暮らしとの共生は可能なのでしょうか。どんな地域づくりができれば、トキとの共生は成り立つのでしょうか。このシンポジウムを皮切りに、トキと共生し、佐渡の人々が自ら生き生きと暮らせる地域づくりの方法を考えることになります。

今回のシンポジウムでは、これまでのトキと佐渡の関わり、コウノトリやガンなど、トキと同様に絶滅や絶滅の危機にある野鳥と地域の共生を模索している実例などを取り上げ、佐渡に住む方々を中心に考えるきっかけになったと思います。

シンポジウム参加者と発言要旨

開会の挨拶 小林光氏

環境庁長官官房審議官

「トキの生息環境は日本のふるさと原風景のようなもので、自然環境を復元し、維持し、トキの生活と人間の生活が接点を持って共生するためには様々な困難が予想されます。このシンポジウムはなにかをまとめるために開いているのではありません。地域のみなさんとともに今日をきっかけにして一緒に考えていくためのものだと思います」

開催地挨拶 高橋豊氏

新潟県環境生活部長

「21世紀は環境の世紀と言われています。地球温暖化・酸性雨・ダイオキシン・環境ホルモンなど、大きな課題の中で、トキとの共生というテーマは明るく夢のあるテーマです。21世紀の佐渡の大空にトキが舞うことを期待しています」

基調報告 佐藤春雄氏

佐渡とき保護会会長

トキにニッポニア・ニッポンの名前がつくまでの歴史や世界のトキの仲間の解説の上で、戦後、佐渡に戻り、トキと出会い、トキの観察と保護活動をはじめまでのいきさつを話されました。

「トキを保護するには何を食べているか調べなければならぬので、糞を調べました。糞を見ていると、農薬との関係、農薬が使われて、薄まっていった様子がわかります」

基調報告 池田啓氏

コウノトリの郷公園・田園生態研究部長

「トキよりも大型のコウノトリは、大きな松の上に巣をかけて川や田でエサを採る生活をしてきた。トキと同じような経過で絶滅した。昭和60年にロシア・ハバロフスクから贈られたコウノトリが繁殖し、現在72羽となった。コウノトリもトキも、彼らの生息環境を維持していたのは農業のシステムであり、絶滅にも、復元にも一番の要因となる。野生復帰とは、自然環境を維持していた社会システムを、もう一度新たな形で作るということでもある。

兵庫県立コウノトリの郷公園には、野生化に向けて湿地などを用意した場所と増やすことを中心にした場所がある。現在は、野生復帰のために、エサの確保ができるか、危険はないかなどの調査段階にある。野生

復帰のためには、まず、飼育繁殖技術があり、次に、かつて生息していた自然環境の調査が必要であり、社会環境の整備が必要である。社会環境とは、たとえば、かつてコウノトリは田んぼの稲を踏む害鳥とされていた。コウノトリが空を飛ぶとき、地域社会が理解し、受け入れ、地域の環境政策まで考え、取り組まなければならない。

研究したことがらはすべて市民に開放し、ゼミなども一緒に行く。また、野鳥の保護に関わる地域とのシンポジウムを行ったり、ボランティアの養成などへの協力も欠かせない。

近年、地域の農家が、農薬を使わないアイガモ農法に取り組んだり、電力会社が、郷公園の電柱・電線をなくし、地下配線にしてくれたり、ソーラーパネルの会社がパネルを提供してくれたりしている。ロータリークラブは炭焼き釜をプレゼントしてくれた。

豊岡市も、空港やJR、交番、商店街などにコウノトリのマークや絵、シンボルを据え、地域にもコウノトリが根付きはじめた。

野生復帰は世界的にも難しい作業だが、トキもコウノトリも、人との関係が一番重要な生物であり、野生復帰するということは人間にとっても心地よい環境ができるはずである。地域づくりをベースにしながら、野生復帰をやっていきたい」

基調報告 呉地正行氏

日本雁を保護する会会長

図表を使って、宮城県田尻町のガンを保護する活動について解説していただきました。

「蕪栗沼は日本の湿地の中で、かつての原風景が残されている数少ない沼であり、生物多様性の高い沼である。蕪栗沼を特徴付ける生き物がガン類。蕪栗沼では、マガンが、冬になると多数飛来する。

ガンが生活するには、夜、安全に過ごせる広くて浅い沼とエサ場となる広い水田が必要。浅い沼が干拓され、広い田が分断された影響で、生息地が減り、飛来数も減った。今は、1940年代ぐらいに飛来数も増えたが、生息地が40ぐらいから増えないことが、環境の変化を物語る。

4年半前、宮城県が、災害防止の目的で掘削計画を立てた。そこで、行政・農家・議員など環境に関心ある人・生活の中で関わりの持つ人・各分野の専門家な

どキーパーソンと「蕪栗沼探検隊」を行ない、沼のすばらしさを体感してもらった。

そして、それをふまえて議論した。国会でも取り上げられ、掘削不要となった。そして、県の河川課が、蕪栗沼遊水池懇談会をたちあげた。これは関係者すべてが入った円卓会議で、実質的な本音の議論が十分できる場になった。すでに、環境に配慮して事業計画を変更するなどの成果が出ている。さらに、NPO法人の蕪栗ぬまっこくらぶができた。地域の人としっかり根を張った活動ができるようになった。

ガンとの共生は、農業の問題でもある。多くの農家の人は、米に害を与えるのでガンは敵だと考えている。

しかし、一方で、ガンとの共生をはかることもできる。現在の水田は、冬場カラカラだが、ここに水を張ると水鳥にとってはオアシスとなる。そこで、冬期湛水水田を提唱している。不耕起栽培とこの冬期湛水水田を結びつけ、ガンを付加価値として環境に敏感な人に一般より高い値段でコメを買ってもらっている人もいる。初雁米と言って、早生種を植えて「初雁」の頃に「初刈」するコメを作る人もいる。地元のコメを使ったお酒の「雁音(かりおん)」ができて、売上の一部が「雁音基金」とされ、蕪栗沼の環境保全基金になるという仕組みをつくったりしている。

実際の被害もある。田尻町ではガン・カモ類による補償条例を作った。その上で同じ土俵で、ガンを活用する農業のやり方について一緒に考えようという提案を行い、話し合いを続けている。

生物多様性が高いということは豊かな湿地を意味するが、自然に関わる地域づくりをする場合にも、人間の多様性と相互理解が大事である。立場は違っても、お互いが話し合いをする中でお互いを理解する。それにより共通する部分を広げることができ、誰が何をすべきかはっきりする。それぞれが自分の仕事を認識するなかで、農業との共生とか環境教育とか、その他いろいろ担っていく。ひとりひとりの力は小さくても全体として大きなことができ、夢が描ける。やっても楽しいし、誇りも持てる。地域の人が主役になって活動していくと地域の人が生き生きとしてくる。田尻町ではそういう空気が出てきている。この前のワークショップで地元のおばさんたちが、『世界の蕪栗沼は...』と堂々と発言をしている。田尻町は変わったと思う。

どこでも、そこにある宝を見つけ、それをみんなが誇りに思う心を作っていけば、生き生きとした地域活動が展開できると思う」

基調報告 近辻宏典氏
佐渡トキ保護センター長

トキの繁殖行動、産卵、孵化、成長の様子をスライドで説明されました。

「今は、繁殖個体を増やすことが目的の段階であり、中国の協力体制のおかげでできている。繁殖ペアが増えればヒナの数も加速度的に増えていくだろう。それができた段階で、いざ野生復帰というのでは手遅れなので、あらゆる分野の方が手を貸しあっていくべきだ。基本的には、トキは田んぼをキーワードとして人との共生を求めてきた種じゃないかと思う。大変困難ではあると思うがトキという種の本質からいくと、共生は可能ではないか」

「一般的な鳥は換羽といって羽がぬけかわるが、トキはそれをしない。顔の裸出部は赤い色で、冠毛がある喉頭部と毛が短く柔らかい首の部分の皮膚が黒い。そこから色素が剥がれ落ち、水浴びした後、それをこすり付けて羽を着色していく。

かつて、トキには黒白ふたつの型があるとされていたが、繁殖期の色だとはっきり示したのは佐藤春雄先生である」

プレワークショップ報告 佐藤準氏
佐渡トキ保護センター

10月28日に開催した両津市野浦での地元学ワークショップと10月29日に開催したトキの生息地を訪ねたワークショップについて内容と可能性を説明されました。

それぞれの内容については、里地通信11月号で既報の通りです。

「参加した人が同じ物を見ることができ、作業を通して共通の認識を持てるようになる。世代間で情報の伝達ができる。おじいちゃんおばあちゃんが知っているも、子・孫は知らなかったことが、こういう作業を通して伝えられる。他の人たちに調べてもらうのではなく、自分たちで調べるといこと。それによって自分たちの地域の将来を考えるきっかけとなる。

地域の外の人が入るので、地域と外とのつながりがうまれる。地域の中で新しいつながりがうまれる。新しい産物が出てくることもある。自分たちの地域を良く知ることは、地域を作る将来の計画みたいなものに生かされる。

21世紀は環境の世紀といわれる。それを考えるとき、今説明したような地元学のやり方は非常に面白い」

「清水平から生椿で行ったことは、野浦の地元学とは基本的に違う。参加者が自分たちの生活域を調べるのではなく、清水平や生椿は、参加者の生活とは切り離された場所である」

「野浦でのやり方にしろ、トキの生息地調査にしろ、大きな効果を期待できる。方法は非常に簡単なので、四季を通じて何回も繰り返していけば、地域の情報が地域の人たちの中にたまっていき、その中から新しいものが生れるかもしれない。それが将来の、生物と人間の共生につながる可能性がある」

パネルディスカッション

コーディネーター

大島康行氏 自然環境研究センター理事長

パネリスト

小林 光氏 環境庁長官官房審議官

佐藤春雄氏 佐渡とき保護会会長

山本茂樹氏 J A 佐渡組合長

高野 毅氏 生椿農家

地元佐渡の生産者を交えてパネルディスカッションを行いました。

<山本氏>

「J A 佐渡として、日本のトキが最後の生息地として選んだ場所、それだけ環境のいい所ということを活かして農業振興等に取り組んでいきたい。トキが住むのにふさわしい農業を築いていく取り組みが重要で、いろんな人の知恵を借りながら努力したい。

私は椎茸専業農家である。一切農薬などは使っていない。30年間の農業生活を通して、経済優先の中で自然環境が犠牲になっていくのを見てきた。椎茸の原木のために、広葉樹の伐採が必要。そこで、伐採後、杉を植えない、広葉樹を残す地主の山だけとつきあってきた。昔は野ウサギがいたが、害獣ということで、テ

ンが放され、ウサギの姿を見なくなった。生態系が崩れ、山の土砂が流出していく。トキが佐渡の空を飛ぶことは、自然環境が戻ることであり、協力したい」

<高野氏>

「生椿は新穂村の一部。標高300mの盆地である。トキの群れが仲良く餌をついばんでいたところを見て育った。5月になると雪椿が満開、椿の真っ赤な色とトキの色がコントラストとして絵になったことを思い出す。現在は生椿の棚田で米作りをしており、父たちが培ってきた餌場を残していこうと取り組んでいる。

父の故・高野高治は、トキの保護活動を続けてきた。私の祖父は父が幼い頃、「トキも腹を空かしているんだから腹一杯食わせてやれよ、追い払ってはいかんぞ」と言っていた。

戦後、昭和23年から、田んぼにため池を掘って、ドジョウ・タニシ・カワニナ・サワガニなどをトキに与える取り組みをしていた。冬には、新穂村の土屋養漁場さんからコイやマブナの稚魚を買って、田んぼに放して育てた。

地域で、牛を全戸が飼育していたので、たい肥ができ、化学肥料の使用は減り、プランクトンも発生していたため、田んぼでコイが1年で7～8cmに育つ。冬場は除雪して、エサ場を確保していた。この活動はこの活動は20年間続けられた。

昭和34年には生椿全員による、トキのねぐら調査を1年間かけて行なった。飛んでくる方向・羽数・天候・時間まで記録した。子供達まで含めた取り組みであった。調査内容と記録は、新穂村教育委員会に報告して認められ、給餌活動と保護運動は続けられることになった。

東京都世田谷区立給田小学校では、5年生の教科書に記載されたトキの記録が、保護運動と募金活動に前進した。父との間で20年間も募金と文通が続けられた。私自身は、先祖が300年かけて作ってきた生椿の歴史を後世に伝えたい。父が残してきた、あるいはやり残した仕事、亡くなるまでに何とかトキが増えるのを見たいなあといっていたその夢をかなえたい。個人力だけでは大変だが、父がいつも言っていたように、生椿の空に、トキの再来をと思っている。

昭和6年に27羽のトキを見たそうだ。その時の感想は、「辺り一面に牡丹の花が咲いた」ようにきれいだったと感嘆したそうである。

そういう光景を、次代を担う子供達に、もう一度見せてやりたい。達成はできなくとも、道づけを私がやれば、と思って、棚田での米作りと、自己流であるが、あずかった餌場の確保を行っている」

<小林氏>

「中国洋島の奥の、サンチャハという繁殖地では、ひとつひとつのトキの巣を、24時間監視して、ヘビが木にのぼると叩き落とすということまでしていた。繁殖期以外のときは、ねぐらで、トキがサギの群れと一緒にいる。トキはかなり群れで生活する鳥と思う。人がいじめさえしなければ、人になれる感じの光景であった。

昔は、ドウ（トキ）は、サンギ（サギ）・スズメとともに農業に害をなす鳥とされていたから、野生復帰させてもし増えたらどうするか、ということも思い描きながら皆さんと考えていきたい。縮こまらず少し楽しみながら考えていきたい」

<大島氏>

「生物たちが共生しあいながら、豊かな生物相のある自然を作ることと、人間と生き物たちとの共生。豊かな自然との共生を作るために人間が犠牲になりすぎたはいけない。やはり、ある程度の強化は必要だけれども、同時に豊かな人間社会・農村社会を形成することが大事。では21世紀の豊かさとは何かという問題まで含まれてくる。これはいろいろな人達が相互に議論しあって作り出していくものだと思う。総合的な問題を含んでいるので、佐渡に住むいろんな分野の方々が、忌憚なく、21世紀の佐渡の将来がどうなるか考えていただくことが大事。子ども達のためのシンポジウムがあってもよい」

<佐藤春雄氏>

「野生復帰について考えるとき、農薬が問題になるとの声がある。一方で、現実に農薬を使わずにすむだろうか。たとえば、放棄された常水田を餌場にして農薬を撒かない工夫をする、トキが好きな田を借りて、そこを餌場として農薬を撒かないで餌をいれていくようにすればいいと考える。またトキは、田んぼだけでなく川にも依存する。これからの工夫によって、いくらでもトキの餌場を提供できるのではないかと考えている。

松枯れについては、当面高い木で代替することも可能だろう。

減反が進んでいるが、山の田んぼから先に田んぼが減っていく。トキの復帰できる田んぼが減っていく。山の田んぼは減反面積から除外するなどの工夫はできないか。また、田んぼを放棄するとがけ崩れ・水害などの危険が起こる。9月から4月の間、水の管理をする専門の見巡り職員をつくれないうか」

<小林氏>

「農薬の影響については、近縁種での調査なども必要だろう。また、農薬も人間や生物に影響の少ない製品開発が進んでいるので、そういう展望も開きたい。

かつてと今の自然環境は違う。現状の自然環境に手をつけないということではない。たとえば大きくなった杉林を大事にしていく、どういった環境が必要なのか、ちょっと人手をかけることもあるのではないかと。こういう議論をこれから皆さんとしていきたい。

いずれにしても、トキにとっても人間にとっても豊かに暮らしていけるような社会づくりはどうしたらいいか、壇の上ではなく車座になって、朝まで討論とこのをやってみたらよいのではないかと」

<池田氏>

「コウノトリも、観光面でも使える素材。松葉ガニを食べに来るツアーに組み込まれている。10万人規模の人が来てくれる。観光だけでなく、地区の中で、シンボルマークを作ればばん作ったりTシャツを作ったりしている。IUCNのガイドラインにも、野生復帰の事業は地域社会の経済に貢献するというのが項目にある。

トキにしるコウノトリにしる、絶滅の道を昭和30年代から40年代にかけてたどった。ここにいられている方の目のまん前で、絶滅した。逆に考えれば、その頃の経験をいまだ皆さ野生復帰は単なるノスタルジーではなく、松の木がなければ、100年後にできればいい。それまでの間は、人工の巣でもいいから、みんなでわいわい言いながら、楽しくやっていったほうがいい。かつてトキやコウノトリが絶滅したときは、みなさんは、絶滅の歴史を目撃・傍観していただけだった。これからは、歴史を自分達の手で作っていかないと、21世紀はない。歴史の参加者であってほしい」

<呉地氏>

「トキだけを見ているとトキは救えない。それを支えている環境を含めて見ていくことが不可欠だ。環境の問題は、あまり深く入り込んでいくと心が暗くなり出口が見えなくなってしまう。まず夢を描くことと、夢を描ける心を持つことが必要。どういう姿がトキにとっても佐渡の人にとっても望ましい佐渡の姿なのかについて、全体の青写真を皆さんで議論して作ることが大事だ。それができたら、その青写真からかけ離れている現状の課題をひとつひとつ青写真に近づけて行く。環境の問題は、行く先が定まらない。だから青写真を作ることが重要。また、これから佐渡を創っていく人が、楽しいと思わなければその運動は続かない。楽しく生き生きと、夢を作っていくことが必要ではないかと思う。

佐渡に限ったことではないが、佐渡だけを見ていると意外と佐渡のことが見えない。蕪栗沼のある田尻町では10人に1人が海外経験者。いろいろな視点を持っている。何かをやるうというときひとつの視点からは見えないことも、別の視点からは簡単に答えが出るということがある。多様な視点を持つということが問題解決の糸口となる」

この後の交流会では、新穂村村長、両津市市長をはじめ、中国と日本のトキ保護活動をつないでいる水田はなか氏の報告、棚田を守る活動を続ける越後棚田サポーター佐渡支部の報告、生椿地区に近い久知河内地区でホテルの里の取り組みを続ける久知河内ホテルの会の報告、そして、野浦の地元学について野浦公民館館長臼杵昭文氏の報告が寄せられました。

このシンポジウムは、述べている通り、まさにはじまりであり、きっかけです。各地の事例を見ても、野生復帰の主体は、地域であり、地元で生活する人々です。

これからの1年で、どんな変化がうまれるでしょうか。来年もまたシンポジウムを開催します。トキとの共生をめざして変わるところ、変わらないところ、これからの佐渡での議論と活動が楽しみです。

なお、このシンポジウムの詳細な報告集を発行しています。お問い合わせは、里地ネットワーク事務局まで。

里地ネットワーク推薦書籍のご案内

風関連

『風の文化誌』

【著】市川健夫【版元】雄山閣出版(1999年) 207p、2300円+税

季節の風、地方色豊かな局地風 風にまつわる地名・民俗、あるいは防雪林・屋敷森などの風対策の知恵から風力発電などの風の利用まで、日本人が長い間つちかってきた暮らしと文化。

第1章・日本に吹く四季の風/第2章・地方色豊かな局地風/第3章・風と日本人の暮らし/第4章・風の民俗/第5章・風対策の知恵/第6章・風がつくる自然/第7章・風の利用さまざま

『風と人びと』

【著】吉野正敏【版元】東京大学出版会(1999年) 220p、2000円+税

屋根と風、風祭り・風の神話、春と旬、食べ物と風土、風の芸術。さらにジャワの季節風と稲作、南大東島の台風、砂漠の雨と風、フェーンの吹く谷、エル・ニーニョと風、...等々。風の研究50年の著者が“世界の風と人”の思いを語る。

第1章・風と人びと/第2章・風とともに/第3章・インドネシアとモンスーン/第4章・熱帯の風/第5章・タクラマカン砂漠と風/第6章・風の気候

里山関連

『人と緑の文化誌』

【著】犬井正【版元】三芳町教育委員会(1993年) 144p、500円税込、【頒布元】三芳町立歴史民俗資料館・TEL:0492-58-6655

三芳町では人と緑が別々に存在してきたのではなく、長い間共生してきたのである。そして平地林と結びついた循環的・永続的な「二次林文化」を作り上げてきた。.....三芳町の豊かな「二次林文化」を、人と農の具体的営みを横軸に、生きた林の息吹を縦軸にするマトリクスとして再構成。

第1章・緑のオアシスのなりたち/第2章・平地林・ヤマ・雑木林/第3章・ヤマと人と農のサイクル/第4章・伝統的なヤマ仕事と平地林の利用法/第5章・落ち葉利用と三芳の農業/第6章・グリーンマトリクスのひずみ

『森林・林業/視察ガイドブック』

【編】全国林業改良普及協会【版元】全国林業普及協会(1999年) 422p、3500円+税

全国各地の林業地、林業経営、特用林産物、森林レクリエーション施設、市民参加やボランティア活動、木材加工施設、木造建築物など、森林と人々の営み、関わり、地域の結びつきなど、森林・林業の分野にかかわる全国700あまりの事例を各県ごとにまとめてあり、所在地・連絡先、一部ホームページのアドレスも掲載されている。

基層文化関連

『縮刷版 写真でみる日本生活図引(1) / たがやす』

【編】須藤功【版元】弘文堂(1994年) 182p、2200円+税

昭和の失われた生活文化。高度経済成長を境に消え去った日本の伝統的生活文化を生き生きと伝える写真を集成。そこに写されたもの一つ一つをていねいに解説した写真で引く暮らしのインデックス。

第1章・稲作に勤しむ/第2章・稲を育てる/第3章・刈入後の仕事/第4章・山に拓く畑/第5章・畑の作物/第6章・養蚕と牛馬

このシリーズは以下の書籍へと続く。

2とる・はこぶ、3あきなう、4すまう、5つどう、6たたずまい、7まち、8わざ

このコーナーでは、みなさん推薦の書籍を募集しています。このコーナー要領に簡単なコメントをつけて事務局までお寄せください。

イベント・セミナーご案内

民族文化映像研究所

姫田忠義による「映像と基層文化」論
アチック・フォーラム 20周年記念特別プログラム
～民映研 未来へのメッセージ～

2月 狩猟文化と山の信仰

2月9日：日本の詩情(監修・宮本常一、シナリオ・姫田忠義、製作・日経映像)より『天狗と山の神』(1966年)、映画『日光山地の鹿狩り』(1995年)、『金沢の羽山ごもり』(1983年)

2月16日：日本の詩情より『隠れキリシタン』(1965年)、映画『下園の十五夜』(1980年)、映画『陸奥室根の荒まつり』(1986年)

2月23日：映画『イヨマンテ - 熊おくり』(1977年)

3月2日：姫田忠義 講義(2月の総括を含む)

3月 映像と基層文化 記録・現在・未来

3月9日：- 東京都新島村の作品から - 映画『集落の成り立ち』(1997年)、『くさやづくり』(1997年)、『新島の年中行事 - 盆行事』(1997年)

3月8日：- 岐阜県白川村の作品から - ビデオ『白川郷の合掌民家 - 技術伝承の記録 - 』(1994年)

3月15日：- 福井県今立町の作品から - 映画『たまはがね - 子どもがひらいた古代製鉄の道』(1997年)

3月22日：姫田忠義 講義(3月の総括を含む)

会場：民族文化映像研究所

日時：毎週金曜日 18:30開場 19:00開始

参加方法：月会費制(当日空席ある場合、1回参加可)

場所・問い合わせ：アチック・フォーラム

(民族文化映像研究所内)

〒160-0022 新宿区新宿2-1-4 御苑ビル2階

TEL：03-3341-2865 FAX：03-3341-3420

<http://www.tk.xaxon.ne.jp/~mineiken/>

国際ワークキャンプセンター

国内外で各種ワークキャンプを主催。各種団体とも連携して環境や福祉などの取り組みを行っています。

アシ原を耕し湿地や田んぼづくり・観察会

日時：2001年1月27日(土)

場所：神奈川県藤沢市

植林用苗床の手入れ作業

日時：2001年1月27、28日、「緑の里親」プロジェクトの一環

場所：神奈川県清川村

メダカ池作り休耕田のササ刈り

日時：2001年1月28日(日) 毎第4日曜日に定期作業

場所：大阪府富田林市

子ども竹林プロジェクト

日時：2001年2月3、4日

場所：東京都日の出町

「緑の里親」プロジェクト

丹沢に植林するための苗木(フサザクラ)を家庭・学校・職場で種から約2年間育ていただきます。その苗木を丹沢に植林することで、広葉樹の豊かな森を再生をめざします。種は99年の秋に国際ワークキャンプのボランティアが丹沢の山で採取しました。

リストおよび体験談あります

国内外のワークキャンプ一覧、ワークキャンプ体験談をまとめ書籍にしています。

問合せ：国際ワークキャンプセンター

(略称：ナイス)

TEL：03-3358-7140

<http://www.jah.ne.jp/~nice-do/>

エコのもり

「エコのもりセミナー」&「杜の会」 シンポジウム

【21世紀の社会システムと森の役割】 森づくりから始まる人づくり、まちづくり

21世紀の社会システムを創りだすには、もう一度、企業・行政・NPO、そして私たち一人ひとりの役割を見直すことが不可欠です。立場や領域を超えた様々なコラボレーション（協働）や企業の社会貢献活動が、これからの循環型社会をデザインしていくことに繋がるのです。私たちが目指す「森をひとつの軸とする社会システム」とはどのようなものなのか。そのための方策や役割とは。その中での企業の社会貢献活動はどうあるべきなのか。「私たち自身が創りだす未来」につ

いて議論を深めていきたいと思います。

日時：2001年2月22日（木）13：00受付 13：30開演
会場：アムラックスホール アムラックス東京5F（東京・池袋）

対象：森林に関わる行政、企業、市民団体の団体、個人。特に社会貢献担当者や、関係役員など

参加費：無料（ただし、情報交換会は別途3000円）

主催：トヨタ自動車株式会社、社団法人日本環境教育フォーラム

問合せ：エコのもりセミナー事務局（担当：西・青木・黒岩）

TEL：03-3475-7738 FAX：03-3475-7739

<http://www.digitalium.co.jp/economori/>

このコーナーでは、みなさんからのイベント情報を募集しています。このコーナー要領にて事務局までお寄せください。